

小池 宏明 牧師

今回も、主イエス様が十字架に掛かれる直前に語られているたとえ話を取りあげる。十字架の後、復活、昇天と続き、主イエス様は弟子たちと別れなければならない。主は別れる前に弟子たちに預けたいものがある。

**\*それぞれに多く預けられている**

主人であるイエス・キリストが、しもべである弟子たち（教会）に莫大もない財産を預けて旅立った。その財産の単位はタラントであった。1 タラントは 6,000 デナリ。1 デナリは一日の労働賃金に当たる。一日 1 万円の労賃で計算すると、1 タラントは 6,000 万円になる。2 タラントは 1 億 2,000 万円、5 タラントは 3 億円になる。このたとえで「タラント」が象徴しているのは「主なる神様によって、それぞれに与えている資質や能力」のことだ。主なる神様が、一人ひとりに違ったタラントを預けている。しかも、決して小さいものではない。よく「私なんか、何もできない。」「何の賜物の与えられていない。」と謙遜そうに言う方がおられるが、気付いていないだけで本当は豊かに与えられているのだ。

**\*忠実に用いる喜び**

このたとえ話の中で、5 タラントを預けられたしもべと、2 タラントを預けられたしもべは、それぞれ、お預かりしたものを忠実に用いて、主人の財産を増やした。主人は大喜びしている。(19-23 節) ここで注目したいことは、二人のしもべが儲けた金額によって、主人の評価に違いがないことだ。しもべたちが、主人のものを忠実に用いたことを、主人は喜んで、喜びを分かち合っている。

私たちには豊かに与えられているタラントを、主の信頼に応えて、忠実に用いることが、求められている。それが主の喜びにつながり、ひいては、私たちの喜びにつながる充実した信仰生活になるのだ。

**\*悪い怠け者にならないように**

一方、1 タラントを預かったしもべは、地面に穴を掘って主人の財産を隠したのだ。(18 節) その理由は、このしもべは、主人が蒔く種を与えないで収穫ばかり取りに来る酷い人だ、という認識を持っていたからだ。(24、25 節) これは、主なる神様への不満や不信感を表している。こんなしもべに対する主人の評価は、とても厳しいものだった。(26~30 節) しもべは、主人から預かっていた 1 タラントをそのままお返ししたのに、主人の第一声は「悪い、怠け者のしもべだ。」であった。

私たちは、今、主なる神様から与えられているものを、埋めてしまわずに、豊かに用いて、忠実に生きるように求められている。主は私たちに期待しておられる。